

# 知識探訪

## 多民族社会の横顔を読む

協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

### ヤスミン・アフマド映画と「新しいマレーシア」

山本博之 (京都大学東南アジア地域研究研究所・准教授)

ヤスミン・アフマド監督 (1958-2009) は、劇場用長編の第一作となる『細い目』(04 年) を発表して以来、世界各地で高い評価を得て新しいマレーシア映画の牽引役となってきた。その影響はマレーシア内外に及び、彼女の没後 10 年目となる 19 年 7 月、日本でもヤスミン作品の特集上映が企画され、ヤスミン作品の研究書が刊行された。ヤスミンが作った映画が娯楽を超えて社会にインパクトを与えてきたことにはどのような意味があるのだろうか。

一般に、村や藩の範囲で世間を捉えていた人々が、村や藩を越えた国の範囲で世間の存在を実感するようになっていくのはどのような仕組みによるのか。これに関して、印刷技術の普及によって新聞・雑誌が登場したことで、直接出会ったこともない範囲の人びとのことが想像されるようになった一方で、新聞・雑誌が書き言葉のメディアであることから言語別に世間の存在が実感され、その結果として民族意識や国民意識が生まれたという学説がある。

マレーシア(マラヤ)では、20 世紀に入ってイギリスの植民地下で民族意識が芽生え、マレー人、華人、インド人の 3 民族という考え方が定着した。20 世紀初頭に新聞・雑誌が一般に広まっていき、それがマレー語、華語(中国語)、タミル語、英語という言語別のメディアに発展したことは、この理論を裏付けているようにも思われる。

ただし、この学説の弱いところは、当時いったいどれだけの人が読み書きできたのかということにある。ある程度の教育を受け、新聞・雑誌を定期購読できる経済的な余裕がある人は、数が限られていたはずだ。この批判に対しては、コーヒーショップで新聞をまわし読みしたとか、モスクや市場でのうわさ話を通じて情報が伝わったとかいう反論が試みられている。

近年では、演劇や映画のように物語を通じてメッセージを伝えるメディアの重要性にも目が向けられつつある。ワヤン・クリット(影絵人形芝居)やバンサワン(大衆演劇)は、現在のマレーシアでは地方文化や伝統文化という扱いを受けているのに対し、映画は日本軍政の後に流行して以来、多少の波はあるものの、今日まで人気を維持している。

演劇や映画では、ハン・トゥア物語のように人びとがよく知っている物語をベースに、同時代の社会状況を踏まえたメッセージが織り込まれ、観客はメッセージの織り込まれ方にウィットとある種のスリルを感じ

ながら物語を楽しんできた。民族意識や国民意識の醸成は、独立を境に終わるのではなく、今日でも続いている。その意味で、映画はマレーシアの国民意識の醸成に重要な役割を果たしてきたメディアの一つだと言える。

マレーシアの映画は言語別・民族別に作られることが多かったが、その壁を取り払おうとしたのがヤスミン監督だった。『細い目』から『タレントタイム』(09 年)まで 5 本(テレビ用の『ラブン』= 03 年 = を含めれば 6 本)の長編作品を撮り、51 歳の若さで亡くなったヤスミン監督は、映画制作より前にテレビ CM の制作で知られており、ペトロナス社が独立記念日や民族ごとの祝日に流す物語性を伴うテレビ CM を始めたのが彼女だった。

テレビ CM は「おもしろいものが一番」と考えたヤスミン監督は、エスニックジョークを含めたさまざまなテレビ CM を作った。それらに通底していたのは、独立して 50 年を迎えるマレーシア社会は今のままでよいのかという問いかけだった。その意味で、独立期の民族意識の醸成と事情が異なるものの、真の意味での「もう一つの独立」に向けて国民意識を育てようと呼びかけるものだったと言える。

18 年 5 月の政権交代を経て、現在のマレーシアではそれぞれの分野で「新しいマレーシア」が模索されている。ヤスミン作品は旧政権中には保守層から激しい批判を受けたこともあるが、「新しいマレーシア」ではどのように位置づけられるのかを見守っていきたい。

#### < 筆者紹介 >

1966 年、千葉県生まれ。東京大学大学院総合文化研究科修了。学術博士。マレーシア・サバ大学講師、国立民族学博物館助教授などを経て現職。専門はマレーシアの地域研究。サバ州・サラワク州の社会史、ジャウィ(アラビア文字表記マレー語)の社会的役割、災害復興時の社会再編、物語文化圏と映画など関心領域は広い。編著書に『マレーシア映画の母 ヤスミン・アフマドの世界』(英明企画編集、2019 年 7 月)がある。日本マレーシア学会(JAMS)運営委員。